



年間第 21 主日 (ルカ 13:22-30)

人はしばしば自分で戸口を狭いものにする

「お前たちがどこの者か知らない」(13・25) こう言われた経験があるでしょうか。経験がなければ、一度早めに経験しておいたほうがよいと思います。早めに経験していれば、取り返すチャンスがあります。

もし一度も経験せずに人生を終えたら、審判の日にこの言葉を聞かされるかもしれません。「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」(13・26)。最後の場面でこんな主張をしても、何の説得力もありません。生きている間に一度でも、この場面に立たされていたら、準備のしようもあつたでしょうに。

あるいはこう言い張ったとしましょう。「日曜日のミサに来ましたし、説教も聞きました。聖体拝領もしたのです。」しかし心の内も見通される神が、「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」(13・27) と言うとしたら、何を言っても無駄です。中身の無い、うわべだけの信仰では通用するはずがありません。

私は、司祭としての出発点で、「お前たちがどこの者か知らない」と言われた経験があります。その苦い経験が、私の司祭生活の薬になっています。大神学院の神学課三年生の時、老司教会に実習に出かけました。小学六年生の受け持ちで、堅信式を受ける学年でした。

一人、ものすごく手のかかる子供がいました。出席数が少なく、出席していても身が入らず、毎週この子供のことで頭を痛めていました。それでもようやく堅信式を受けるだけの準備ができて、私は堅信式の当日を迎える前に実習を終えて、私自身の助祭叙階の準備に入りました。

さらに助祭としての一年が過ぎて無事司祭となり、お礼参りの初ミサに老司教会に行ったのです。そこに立派な中学生になったあの子供がいました。仮に太郎君としましょう。懐かしさでいっぱい、毎週苦勞させられたこともすっかり忘れて「おー太郎君。立派になったねえ」と声をかけた時でした。「すみません。神父様が誰か分かりません。」

心の中で叫んでいました。「冗談やろ～？お前のために俺がどれだけ頭を悩ませて、心配したと思っているの？」何と言いますか、司祭になって最初のショックが、最大のショックだったわけです。この時のことが今も薬となっていて、以来三十年が経ちましたが、何かの形で覚えてもらえる働きでなければ意味がないとつくづく思ったものです。

神は私たちに対して、義理立てすることなど何もありませんから、「お前たちがどこの者か知らない」と言うことも全く自由です。しかし、私たちの働きがうわべだけでなく報いを当てにしない真の奉仕であれば、何かを取り繕ったりせずとも、神は私たちを覚えてくださるでしょう。

前もって苦い思いをしておくことは役に立ちます。そこから残りの人生で、神に覚えてもらえる生き方に立て直していきましょう。今であればまだ十分時間があります。うわべだけでない真の信仰生活は、事情説明などしなくても神に覚えてもらえるからです。